

Alert 37号

反天皇制運動

[通巻 419 号]

2019 年
7 月 9 日発行

第X期・反天皇制運動連絡会

野次馬日誌 — * 9 集会の真相 — * 10 反天日誌 — * 12 集会情報 — * 12

マスコミじかけの天皇制 (36) ● 天皇制の「植民地支配・戦争責任」に時効はない！
——「壊憲天皇制・象徴天皇教国家」批判 その2——天野恵一 * 8

太田昌国のみたび夢は夜ひらく (109) ● 「一流の」帝国主義国の指導者の言動——太田昌国 * 7

ネットワーク ● 揺籃期の徳仁天皇制との対決を！
7・15、8・15、そして10・22即位礼反対の闘いへ！——井上森 * 6

状況批評 ● 戦争責任と天皇、雑感——渡辺美奈 * 4

反天ジャーナル ● はじき豆、宮下守、北 * 3

今月のAlert ● 「7・15徹底検証！ ナルヒト天皇制」シンポへ！—— * 2

重苦しい春が漸く過ぎて、少しは明るい話題にしたいと思って、あれこれ頭の中を探ってみたが、心の底の方からそれはないんじゃない？との囁きが突き上げてくる。テレビを見るのにも、新聞を開くにも用心してあの話題は避けたい！と逃げて逃げてきたけれど、この欄を引き受けたからには、と覚悟が決まってきた。

春先から「〇〇最後」「××初の」という言葉がどこでも垂れ流されて、どれだけ耳を覆っても避けきれなかった。ここにきて「××初の台風」など、報道の逡巡のなさはどういうことなのだろうか。「二種の神器」の現出にも苛立った。袋入りの、科学的根拠のないものを恭しく捧げ持っている姿をテレビで写す！芝居の中継そのままに。

馬鹿げた一連の儀式が終わると、ガラス張りの窓から手を降る何人かの人を見るために、夥しい人々が城に押しかけ、警備の命令に従って行動し、挙句の果てにハタを降り、バンザイをする。70年ほど前の悪夢が甦ってきたようだ。

まだ終わりではない、秋にはバカげた大嘗祭騒ぎがやってくる。高御座なる古代の遺物を大枚かけて輸送し、その上で茶番劇が繰り広げられるのだ。神饌の田選びのためにアオウミガメを殺して亀トを行うなど、時の逆流が信じられない。

福沢諭吉は疑問符付きの人物だけど、あの「天は人の上に人を作らず……」は、敗戦後の民主主義っ子としては身に染みついて離れないフレーズなのだ。なぜ、実現しないのか。

歴史的にも、身辺の事象をみても、家単位の存続の長さなどしれたものだ。起こったり消えたりしながら私たちは生きていく。少子と妾なしの現代では家の寿命は短いものだ。「墓終い」という言葉がこれからを暗示している。自然に任せないで無理を通せば悲劇が生れるのではなからうか。すでにその兆候が……。

(津田利洋子)



250 円

●定期購読をお願いします (送料共年間4000円)

●郵便振替 00140-4-131988 落合ボックス

東京都千代田区神田淡路町 1-21-7 静和ビル 2A 淡路町事務所気付 落合ボックス

TEL / FAX 03-3254-5460 URL <http://hanten-2.blogspot.jp/> mail: hanten@ten-no.net

今月の

Alert

7.15「徹底検証！ ナルヒト天皇制」シン



徳仁が即位して二ヶ月。即位関連諸儀式の前半が一段落つく五月末から、大きなものでも米大統領会見、愛知植樹祭出席、仏大統領会見等々と、天皇皇后は精力的に動き続け、宮内庁HPの日録はビッシリと埋まっている。その間の新天皇・皇后への礼賛記事・祝賀ムードの押しつけ状況は尋常ではなく、地方議会の全会一致をめざす賀詞議決や、天皇制に反対する人への尾行なども含め、天皇制ファシズムとしか言いようがない状況が続いている。天皇制とはこういうものなの、そのことに気づかせないのも天皇制だ。

また、皇后となった雅子は「生き生きと活躍」している。最悪のトランプ米大統領やマクロン仏大統領との「通訳を介せず」を売りとする会見賛美報道には、おどましくて吐き気すら感じた。しかし雅子復活劇は賛美一色だ。皇太子妃時代の彼女に、ほんの少しでも同情する気持ちがあったからこそそのゲンナリ感であり、さらにゲンナリ。

新天皇皇后のトランプとの会見は、現在の沖縄の基地問題、侵略戦争の責任問題とは完全に切り離され、賛美の対象でしかない。これは反天・反基地・反戦運動の大きな課題だ。古すぎるスローガンだが、やはり課題のクロソバーであり、運動が繋がっていくしかない。

この一ヶ月、記録しておきたいことは多いが、どうでもいいような「話題」として片付けられそうな秋篠家問題に少し触れておきたい。秋篠夫妻は六月二七日からポーランドを

公式訪問した。「皇室外交」の問題はここでは横に置き、いま週刊誌次元で取り沙汰されている、出発前の二二日に行った記者会見を巡り、少し考えたことだ。

眞子の結婚問題について秋篠はこう答えている。「私は娘から話を聞いておりませんので、どのように今なっているのか、考えているのかということは、私は分かりません」と。この言葉にたいして、秋篠がなかば匙を投げた的な評価や親子断絶など、批判的に語られ、破談宣言を暗に期待する記事が目立つ。しかし、親が娘の結婚に対して公に干渉することの方がおかしい話ではないのか。「自由を重んじる」という評価の秋篠らしい言葉であり、むしろ、このままでは結婚を認められないといった以前の家父長的な対応を反省したものとしても読める。実際、そのようなトーンの記事もちらほらある。また、報道にはないが、秋篠の以下のような応答もある。女性皇族の役割についての質問で、「(男女皇族に)求められる役割というのは基本的に同じだと考えています。というか、特に女性に求められることというところが、今、思い付かない」と。

一五年前の、徳仁による「人格否定」発言を思い出させる。この「人格否定」発言は、雅子を「子産み」機械に貶めていることへの批判として読むべきであると、私は考えている(これで徳仁を持ち上げるつもりはない。念のため)。徳仁については、二ヶ月前の即位後の一般参賀で述べたことばで、「国

民」が「みなさん」に変わったということに、高い評価を与える言論もあった。

要するに、世代交代で天皇家は、脱「家父長制」、男女平等思考・非権威主義的対応に傾き始めているという読み方だってできるのだ。少なくとも、秋篠宮も徳仁天皇も、家父長然とした対応を、意図的であるかどうかはともかく、避けている。しかし、それならいいの。身分制、家父長制、女性蔑視思想に貫かれた皇室典範は、皇室に向けたものであるが、同時にこの国の法律であり続けることに変わりはない。

ここで紹介する秋篠や徳仁の言動は一部ではないが、先代天皇を反安倍の立場で称賛してきた「リベラル」派が、喜びそうなエピソードばかりである。しかし、天皇制は劣化しながら進化しているだけなのだ。それは、あるべきとされてきた伝統や制度を脱構築しながらの進化といえる。

これから出てくるのは皇位継承問題である。「たかだか一五〇年の伝統」と言っている私たちではなく、実は、「神武天皇以来の家系」を重んじている天皇たちの方である。天皇たちは常に、「古く遡れば」というエクスキューズを懐に入れている。皇位継承者不足のいま、女性・女系天皇を認めさせる方向に動く可能性は大きい。

反天連も参加する「おわてんねっ」とでは、七月一五日、「徹底検証！ナルヒト天皇制」を準備している。みんなで徹底検証だ！

(桜井太子)

天皇代替わり騒動前半戦

あれやこれやで「改元」騒動が過ぎ去っていった。秋の即位礼・大嘗祭を後半戦とすれば、とりあえず代替わりの前半戦が終わりつつある。

今回わかったのは、やっぱりみんな役所や仕事での元号使用にはけっこうウンザリしているということだ。「いつそ元号廃止すればいいの」と話したり、ネットに書いたりする人はけっこう見かけた。

他方「元号を廃止すべきだ」と言ったら、知り合いから頼んでもいないのに反論された。いわゆる「効率だけで伝統をなくしてしまうのはよくない」とのことだった。でも、「強制には反対」ともいう。元号の問題は、それが存在する限り強制力があるはたらいってしまう点にあると思う。政府が「元号を使っても使わなくてもどっちでもいいよ」ということは今後もないだろう。元号強制がなくなるのは、恐らく元号が廃止されるときに違いない。でも、そのことがなかなか共感してもらえない。反天皇制運動が拡大するためには、この辺りの肌感覚をもっと多くの人に理解してもらうことが鍵ではないかと思う。

他方、「元号めんどくさい」と大っぴらにいう程度には、天皇制も「妥協」を強いられているともいえる。今後も綱引きは続く。後半戦もがんばろう。

(はじき田)

路上飲酒のみ禁止は差別でしょ

「渋谷駅周辺地域の安全で安心な環境の確保に関する条例」が六月の渋谷区議会でも可決成立した。来街者には区規則で定める区域内の道路・公園、広場その他公共性を有する場所での飲酒禁止を求めながら、事業者には区の実施する酒類販売自粛等の施策に協力を求めるだけ。

そもそも飲酒とハロウィン迷惑行為の因果関係の立証ができますか。立証できたとして飲酒とハロウィンでの迷惑行為に因果関係があるなら、なぜ路上は飲酒禁止で、飲食店での酒の販売は自粛なの。

飲食店で酒飲んだ人が路上に出てきて迷惑行為をしない保証なんてどこにもない以上、平等に扱うなら一律禁止にすべきなのに、路上飲酒する人と店で酒飲む人を条例で差別的に取り扱つと。酒飲まないから関係ないと思った皆さん。のんべえだけ規制対象じゃないから。

七条に「来街者は、法令に定めのあるもののほか、渋谷駅周辺地域の公共の場所において、正当な理由なく、次の各号に掲げる行為をしてはならない。(1)音響機器等により音を異常に大きく出す行為」とありドサクサ紛れで表現も規制する。

この条例により渋谷駅周辺のマイク情宣に対する警察の介入が一段と激しくならなきゃいいけどね。

(宮下守)

歴史を直視しようとしらない場所で

先日、友人たちと台湾に行ってきた。総統府や二二八記念館にも行ったが、初めて行った「白色恐怖景美紀念園區」は見応えがあった。

ところで総統府。以前と展示がずいぶん違っているのにびっくりした。入り口の床に「POWER TO THE PEOPLE」という文字が描かれ、ひまわり運動や、総統府前を埋め尽くすデモの写真なども展示されている。素直にすごい。一方、以前はあったはずの霧社蜂起や台湾人日本軍兵士に関する展示が見当たらない。

台湾大学近くの小さな書店で買った雑誌の特集は「歴史就是未来(歴史こそ未来)。戒嚴令解除後の若い世代の表現者や研究者、活動家によるさまざまな歴史記憶再構成の試みが紹介されている。参観した展示施設の内容を始め、この地域における脱植民地化の実践としての移行期正義の、着実な進捗に目を見張るばかりだった。

総統府が総督府であったという自明な事実が示すように、五〇年代白色テロの地層の下には日帝統治時代の地層が連続している。私たちが自らの課題としてある脱帝国の課題を果たすうえで重要なことは、彼らが自らの歴史に対してそうしているように、日本を含む各地で、この地層を自覚的に直視していくことなのだ。

(北)

状況批評

思想・状況・批評

戦争責任と天皇、雑感

渡辺美奈

(アクティブ・ミュージアム
「わたちの戦争と平和資料館」(wam))

■裴奉奇さんと姜徳景さんのメッセージ

「謝りもしないで死におつて」。一九八九年一月、天皇裕仁が死去した二ユー
スに、沖縄に住む裴奉奇さんは、一緒にいた金賢玉さんにこう語ったという。
裴奉奇さんは、敗戦の前年に朝鮮から沖縄・渡嘉敷島に連れていかれて日本軍
の「慰安婦」にされ、戦争を生き延びたものの故郷に帰ることはなかった。最
も早くに「慰安婦」としての被害を語ったひとの一人で、その姿や証言は映画
や本に記されている。アジア各国の女性たちが日本政府の責任を追及し始めた
一九九一年一〇月に沖縄で生涯を閉じた。

「責任者を処罰せよ」という絵を最後に描いて亡くなったのは、姜徳景さんで
ある。姜さんは、誰が自分をこのような目にあわせたのか、犯罪者の裁きを求
めて一九九四年、東京地検に告訴状を持って行った人でもある。韓国ソウル近
郊のナムの家で絵を学ぶなかで才能を開花させ、心に突き刺さる絵をたくさ
ん残した。肺がんに侵されていた晩年、姜さんは「責任者を処罰しなさいって
いう絵を描きたいです」と語った。取材者であった土井敏邦さんが「責任者
って？」と問い返すと「そんなあなたに言わないよ、あなたは小さかったから」
「責任者を処罰しなさいっていう絵を描いて、私、死にます」と強い眼差しでつ
ぶやいた映像が残っている。一九九七年に姜さんが亡くなる前に描いた「責任



『責任者を処罰せよ—平和のために』姜徳景 1995年
アクリル・キャンパス 610 × 410mm ナムスの家所蔵

者を処罰せよ——平和のため
に」という絵は、厳しい処刑
の図で、木に縛りつけられた
男は裕仁に酷似している。鮮
やかな赤い背景のなかには白
い鳥が飛び、裁きが平和に繋
がるかのように、木には卵が
入った巣が描かれている。

■天皇裕仁を裁いた女性国際戦犯法廷

日本が主権を回復した一九五二年以降、連合国が裁かなかった戦犯たちを、
日本人々は自らの手で裁くべきだったと、それを怠った。国体護持と称して
政治的に立ちまわって自らの延命を実現した裕仁は、戦争犯罪人として裁か
れることもなく、一九九〇年代に高まりを見せたアジア各国からの植民地支配責
任、戦争責任を追及する声を聞くことなく、一九八九年に「死におつた」。

故松井やよりさんは、姜徳景さんの絵に託された思いに応えたいと、
一九八八年の日本軍「慰安婦」問題アジア連帯会議で、日本軍性奴隷制を裁く
ための女性による民衆法廷を提案した。二年半の準備期間を経て二〇〇〇年に
東京で開かれた「女性国際戦犯法廷」は、個人の刑事責任と国家責任を裁くユニ
ークな法廷だった。末端の兵士ではなく、女性たちを性奴隷化したシステムを計
画、実行した軍高官（中将以上）の責任を問ひ、天皇裕仁をはじめ、安藤利吉、
畑俊六、板垣征四郎、小林躋造、松井石根、寺内寿一、東条英機、梅津美治郎、
山下奉文の計一〇人が、日本軍性奴隷制の責任者として裁かれた。女性たちを
性奴隷化するという犯罪は抽象的な軍や国家によってなされたのではない。い
つ、どこで、誰が判断してこのような犯罪がなされたのか、真相究明をとおし
て個々人の責任を問わなければ、次の行動に影響を与えず、再発防止も困難で
ある。みんながどこかに責任を負うといった類の曖昧な責任追及は免責を生ん
できた。よって国家責任には、犯罪を裁かなかった責任や事実を隠蔽した責任
も含まれている。

法廷開催時、すでに明仁が天皇になっていたが、明仁は招請されていない。
一九三三年に生まれた明仁が戦争の中で行われた性奴隷制という犯罪行為に対
して個人として刑事責任を負うわけではないからだ。日本軍性奴隷制の責任者
として訴追された被告は、東京裁判で他の罪で裁かれた者も含めて、すべて死
者だった。

女性国際戦犯法廷の思想を受け継いで二〇〇五年に設立されたアクティブ・
ミュージアム「わたちの戦争と平和資料館」(wam)は、常設展示として天皇
以下九名の軍高官を、日本軍性奴隷制の責任者として展示している。日本に「平
和博物館」はあまたあるが、天皇を戦争犯罪人として掲げる日本で唯一のミュー
ジウムである。

■ドイツの戦犯の子どもたち

二〇一一年にイスラエルの監督がつくった「Hitler's Children」というドキュメンタリー映画がある。残念ながら一五分程度の宣伝ビデオしか閲覧できていないが、それでも登場人物の証言から強い印象を受ける。

ヒトラーの後継者と目されたこともあるヘルマン・ゲーリングの娘は、新たなゲーリングを生まないために、きょうだいともに避妊手術を受けたという。一方で、ハインリヒ・ヒムラーの娘は、親からの悪い血を受け継いでいるという考えは、すべて遺伝子で決まるというナチスの理論を支持していることになる。と異を唱えるものの、ユダヤ系の男性と結婚した彼女は、夫の家族の視線に無関心ではられない。ポーランド総督だったハンス・フランクの息子は、戦犯の子どもとして生きるには、父親が犯した犯罪に向き合うが、最後まで親を擁護するかの二つの道があるという。兄や姉は親の犯罪に向き合わず、南アフリカへ移住してアパルトヘイトに加担したが、自分はユダヤ人を大量殺戮した行動を恥じ、自分にも責任があると感じると、その思いを様々なメディアに登場して語っている。

■日本の戦犯の子どもたち

祖父の戦争責任に向き合おうとしている人は日本にもいる。日本陸軍第三軍の中將、牛島満司令官の孫、牛島貞満である。軍服姿の「立派なおじいちゃん」の写真が実家の応接間に飾られ、家族は戦後、六月二日の命日には学校を休んで靖国神社にお参りしていたという。しかし歴史を学ぶ中で祖父の行為に疑問を持ち、中学二年からは牛島家の命日の行事に参加をやめ、教師として沖縄戦の実相を探り、後世に語り継ぐ責務を自身に課していることを雑誌で語っている。

一方で、戦犯として名前がよく知られている東条英機の曾孫は、二〇一五年にオーストラリアのテレビ番組に出演し、「曾祖父は二つ良いことをした。二万人のユダヤ人を救ったことと、(西洋に対抗する)大東亜会議を開いたことだ。でも、戦争に負けてしまったので何も評価されなかった」と抜かした。第三者ではなく、曾孫であるからこそ発言の機会を与えられた東條英利は、曾孫として批判されるべきである。安倍晋三や麻生太郎も、戦犯の子や孫であるという単純な事実から批判を受けているのではなく、その威光(地盤・看板・砲)を

受け継いで政治権力を持ち、安倍晋三であれば岸信介を尊敬し美化したうえで、祖父と同様に軍事化を進める人権無視の強権的な政治家であるからこそ、祖父との連続性をも批判対象となっているのだ。

親と子は別人格である。罪を犯した親のもとに生まれても、子は自らの人生を選択して生きる権利がある。戦犯の子はしかし、少なくとも親の犯罪を認め、親とは違う生き方を示す「振る舞い」が期待されるのではないか。

■「天皇制」の戦争責任

東京裁判の判決に基づいて七人に死刑が執行されたのは一九四八年二月二三日だった。明仁の一五歳の誕生日にすることで、生涯にわたって戦争責任の問題を忘れないようにするためだったという噂が本当かは知らないが、少なくとも明仁は在任中、戦争のことを無視しなかった。しかし、明仁がなしたのは、一九九〇年代により明らかになった元帥・裕仁の戦争責任に言及することなく平和主義だったと喧伝し、憲法で定めた国事行為にはない「公務」と称された様々な場面で、責任を巧みに回避した「遺憾の意」を表明するという、極めて政治的な行動だった。

その明仁に対して、日本軍の「慰安婦」にさせられた吉元玉さん(平壤出身、現在はソウルに住む)が謝罪を求める手紙を出したという。二〇一九年四月一八日付の韓国・京郷新聞ウェブサイトでは、手紙の内容を紹介しながら、天皇の権威が万世一系に基づくならば、明仁は先代の誤りについても責任を負う姿勢を見せなければならないと解説している。

天皇裕仁の死後に聞くようになった気がする「天皇制の戦争責任」という言葉は、植民地支配や侵略戦争を遂行せしめた天皇制そのものが持つ差別と支配、抑圧の構造を指摘しているとは思って、明仁や徳仁に対して「戦争責任を果たせ」と名指すのであれば、彼らの責任は何なのか具体的に提示していく必要もある。主権者である私たちは、天皇が「何かをする」ことを期待したり求めたりするのは間違っている。政治的な権能がないはずの天皇については、憲法に定めた国事行為のみに限定し、「公務」と称して「慰霊の旅」に出かけるような行動、そこでの勝手な発言はさせるべきではない。主権者たる私たちは、私たちの手によって、憲法一条を削除して天皇制に終止符を打つ、その準備を重ねるしかない。

どうぶつ-NETWORK

揺籃期の徳仁天皇制との対決を！

7・15、8・15、そして10・22即位礼反対の闘いへ！

井上森（終わりにしよう天皇制！「代替わり」反対ネットワーク）

◆「天皇制民主主義論」の行方

あの主張はどこにいったんだろう？

「平成」末期、政治的言説の一部に急速に浮上した「天皇制民主主義論」。安倍政権と前天皇明仁が厳しく対立しているという「推定」を根拠に、「新左翼」の一部をすり取り込む形で、左派リベラルの中に拡大した主張。あえて二分法で述べれば、安倍には「独裁」「戦争」「戦前天皇制」が割り振られ、明仁には「民主」「平和」「象徴天皇制」が割り振られるという議論。

私たちはその主張の愚かさ・誤りを「代替わり」反対闘争のなかで幾度も指摘してきた。その議論のフレームそのものと対決することが、今次「代替わり」の大きな主眼であったとさえ言える。

だが（予想もされていたことであるが）、徳仁への「代替わり」後その手の主張は陰を潜めている。理由はハッキリしている。徳仁がどのような人物か、左派にとって自らの理想を託してもいい存在なのか、みな測りかねているからだ。「意図」も分からなければ、「力量」も分からない。だから「新天皇も本当は安倍政権に反対している」という型の主張は今のところ見られないのだ。

しかし私はここに、「天皇制民主主義論」の不誠実さを覚える。「誤り」という以前に不誠実な主張だと思う。もし本当に、「天皇制には政治権力の暴走を止める力がある。これは日本国家の歴史的な

知恵である」と信じるなら、「代替わり」で天皇制が不安定な今こそ、新しい天皇を支える、新しい「天皇制民主主義論」が論じられるべきなのに。あるのは精々「安倍による天皇の政治利用反対」という程度の消極的スローガンくらいで、天皇を旗頭に安倍と対峙していくと言わんばかりの積極さはどこにも感じられない。

その議論の展開は欠けたままだが、「平成」末期の「天皇陛下万歳」の熱気には余熱があり、政治的慣性が働く。もっとも象徴的な出来事は、五月国会であげられた「天皇陛下御即位賀詞決議」への日本共産党の賛成である。この最悪な行為の影響で、現在各地の地方議会にかけられている同様の「賀詞決議」（日本会議の運動である）に、共産党が賛成し全会一致で議決（あるいは無党派のみ反対）という事態が相次いでいる。市民の働きかけで際どい「棄権」を共産党に選ばせた議会もいくつかある。この攻防の顛末はいずれ報告されると思うが、「天皇制民主主義論」の理論的空白を「平成」末期の熱気の余熱が埋めようとしているという、現在のそんな直観だけは書き残しておく。

◆7・15討論会を経て、夏・秋の闘いへ！

さて、「5・1」即位反対デモでの五〇〇人の結集を経たおわてんねつとの次の方針は、この新天

皇に対する理論的空白に、反天皇論を介入させることである。そこで七月一日、「徹底検証！ナルヒト天皇制」討論集会を開催する。

今その準備の過程で、徳仁について書かれた本を大量に読んでいる。親王・皇太子を六〇年もやっただけあって、十分に素材はある。一九六〇年に生まれた徳仁は、退院の時からテレビに写っている。はじめは「ナルちゃん」のちに「ヒロノミヤ」として、「悩める夫」として「子煩悩なパパ」として、徳仁はメディアに物語を紡いできた。一つ一つは大眾の記憶の断片に留まる程度であるうが、それでも即位した今後、何度でも反復されることで強度を増していきそうな物語が確かにある。この物語を根拠に、新しい「天皇制民主主義論」への誘惑が生まれるに違いない。だからそこを、先制的に叩く。依然不確かな徳仁天皇制に対して、こちらから線を引く。

一つだけ「発見」を。だいたい皇室本は元号で書かれていて最初はピンと来ないが、明仁・美智子の三人の子どもは皆一九六〇年代に生まれている（徳仁六〇年、文仁六五年、清子六九年生まれ）。つまり「美智子様の子育て」がウンヌンされた時期は、私たちの年表では最も苛烈な「政治の季節」だったのである。新左翼運動における天皇論の不在を改めて痛感する。

※※※

7・15集会の成果をもって、今年の8・15集会デモはおわてんねつとで取り組む。10・22即位礼、そして一月の大嘗祭にも対抗アクションを取る。徳仁天皇制への抵抗の言動をしっかりと作り上げ、合流した新しい仲間とも手をつなぎながら、今年後半の闘いを盛り上げていこう！

みたび

太田昌国の夢は夜ひらく 109

「一流の」帝国主義国の指導者の言動



六月末から七月初めにかけてのわずか一〇日間強に行われたトランプ米国大統領の言動から浮かび上がる現在の状況をおさらいしておきたい。六月二十四日、トランプ氏は或る私的な会話で「不平等な日米安保条約は破棄」とか「米軍基地の移設は、米国からの土地の収奪」と語った（米ブルームバーグ通信）。同月二十六日、大阪でのG20会議への出発直前には、「もし日本が攻撃されたら、米国は第三次世界大戦を戦うが、米国が攻撃されても日本はソニーのテレビで見ているだけだ」と語った（米フォックスビジネステレビでのインタビュー）。同月二十九日、G20会議後の記者会見では「日米安保条約は不公平な合意だ。変えなければならぬ」と（日本の首相に）伝えてきた」と述べた（各紙）。

何かといえば「強固な日米同盟」頼みの日本の政府・自民党にとっては、足元が強く揺らぐ思いだろう。事実、野上官房副長官は、二十九日のトランプ発言をうけて「日米間で日米安保条約の見直しといった話は一切ない」と否定した。政府と外務官僚は嘘を重ねていくから、特権的な立場にない一般民衆が歴史の歩みから教訓を得る機会を奪い去ってしまう。トランプが

いう「片務性」は、六〇年日米安保改定に取り組んだ岸信介にとっては、米国を納得させるうえでの難題となって立ちのぼった（原彬久編『岸信介証言録』、毎日新聞社、二〇〇三年）ことくらいは、正直に頭に入れて発言するほうがよい。また、プーチンとの何回もの会談を重ねて日露平和条約が近々にも実現し、「北方領土」が「戻ってくる」かのような「印象操作」を首相自らが行なってきた案件も、日米安保絡みの側面を持つとの自覚もないままの外交交渉だった。ロシアが、日米安保体制下にある日本に北方諸島を返還したらそこに米軍が駐留する可能性に対する危機感を持つことは当然だろう。「地球儀を俯瞰する外交」が、日米安保体制が日米両国に持っている多義的な意味合いを無視し、そして近隣諸国の人びとからはどう見えるかという複眼的な視点も欠いたままに、行なわれてきていることは致命的なことだ。

同時に、一九六〇年から七〇年にかけては、トランプが言うのとは別な意味で「安保破棄論」が民衆運動の中に根づいていたのに、発効後七〇年近くを経た現在では安保体制そのものを問う問題意識が希薄化していることに目を向け

たい。憲法九条を守るといふ気持ちを持ちつつ日米安保体制を肯定するひとが存在することは、沖縄の人びとから夙に指摘されていたが、それは二〇一五年の戦争法案反対運動の中でヨリ露わになった。そのことを忘れるわけにはいかない。

さて、トランプに戻る。大阪G20の会議が終わる六月二十九日の朝、直後に韓国を訪問するトランプはツイッターで、南北非武装地帯での金正恩との会談の可能性に言及した。その後の経緯は誰もが知っている。二人の独裁者の内外施策に対する厳しい批判を持つ私も、この臨機応変な機会の生かし方には、感心する（二人の心に透けて見える、計算づくの思惑を超えて）。そして帰国したトランプは、七月四日の米国「独立記念日」に、ワシントンのリンカーン記念堂の前で「米国への表敬」式典を開き、「米国に不可能なことはない」と演説した。上空にはF35戦闘機やB2戦略爆撃機が飛び、さながら「軍事パレード」の様相を呈した。為政者がこのような式典を行なう時、独立の「本質」を問う声はいつも少ない。

わずか一〇日間に凝縮して表現されたトランプの言動には、これが「一流の」帝国主義国の指導者だと思わせるものがある。身勝手で、強烈な自己中心主義を臆面もなく貫き、それでいて、相手を選んで時に「柔軟な」貌も見せる。五流の垂流指導者の、自信なげな言動との差異を思い、こんな大統領を有する国との関係の在り方をリセットすることに立ちのぼる困難さを改めて思った。

（7月6日記）

マスコミの
天皇帝

36

天皇制の「植民地支配・戦争責任」に時効はない！

―〈壊憲天皇制・象徴天皇教国家〉批判 その2―



天野恵一

「四五〇億円の巨費を投入して二日間（6月28・29日）のイベント、G20大阪サミット・首脳会談が開催される、そのための二七日から二九日の三日間、大阪市民はとんでもない生活破壊を被ることになった。二七日大阪府内の七〇〇近い幼稚園や小中学校・特別支援学校などが休校となり、学童保育も休む。G20メイン会場近辺を除き開園するはずの保育園も『保育士の人繰りがつかず』事実上の休園が続出する。こどもを避難させる手段のない親は仕事を休まざるをえない。交通規制による食材搬送困難により学校給食が中止され、弁当持参や午後休みの学校も出る。大阪府警が『交通量50%削減』の目標を掲げる『空前の交通規制』の影響も大きい。……」

こうレポートしているのは藤岡正雄（『通信反戦反天皇制労働者ネットワーク』〈No.47〉）である。世界の政治首脳・国際機関のトップが集まるG20のための空前の弾圧体制がくりだされつつあった大阪に、私はかつてのXデーの闘いを共有した人も少なくない「郵政」の労働者のグループの反天皇制の集まりに呼ばれて出かけた。この六月三日は「サヨナラ安倍！サヨナラトランプ G20 大阪No.1デモ」の日でもあり、私の行った天満国会会館も警備対象で、奇妙なユニホームを着た警察官がゾロゾロと歩いていた。

そこで私は、まず「反安倍右翼（日本会議系）政権」を公言し、象徴天皇明仁を天皇自身の自己宣伝の言葉そのもの――たとえば「平和」あるいは「民

主主義」さらには「人権」（人に優しい）天皇――として賛美してやまない「リベラル」知識人の大量登場、衆議院本会議での自民党内「日本会議」グループが推進する「新天皇即位の賀詞」への日本共産党の賛同（翼賛国会化）に象徴される、象徴天皇賛美への合流といった、以前とは決定的に転換した混乱状況について問題にし、こうした状況で、私たちがしなければいけないことは、一人一人の天皇制批判の論理（思想）の原則に、立ちかえるべきであることを力説した。かつて人々を国家共同体にしばりつけ戦争に動員する神聖な国家宗教としてフルに機能した天皇制。その宗教的権力（皇室祭祀の持続）は、象徴天皇制の下でも生き続けている。そして、超特権的（血・世襲）の原理）による身分差別制度の国家的象徴として、今も天皇一族（マスコミの「サマ・サマ」漬けの日常を見よ）はフルに動き続けている。その点は、ナルヒトに天皇が「代替り」しても何も変わらない。こういう天皇制という制度はなくすしかない。この私たちのあたりまえの実感に即した〈原則視座〉を、あらためて今の状況の中でこそ自己確認すべし。もう一つ、私がそこで強調したのは、「昭和」から「平成」へのXデープロセスは、戦後、そのギリギリの局面で天皇（制）の侵略戦争・植民地支配責任を大きく問ひ、批判する声が、やっと大衆運動として力強く全国に噴出した局面であったことを想起すべきだ、という点である。その運動のうねりの中を流れていたのは、〈天皇（制）の戦争責

任に時効はありえない〉、〈父の偉業を引き継ぐと宣言して「即位」したアキヒト天皇は、その戦争責任を継承した〉という認識である。とすれば、アキヒトを「平和天皇」とたたえて即位したナルヒト天皇に、その時効なき戦争責任はそっくり引き継がれたということ。この原則視座だ。

大阪から帰ってすぐ、私は、やっと文庫化された美濃部達吉の『憲法講話』を手にした（初版は一九二（明治45）年）。旧漢字とカタカナ文字だらけのひたすら読みにくい元本とは違い、新仮名遣いのひらがな本、やっとスツキリ通読できた。美濃部だけでなくこうした大日本帝国憲法の解釈学の多くのテキストは、まったく専門研究者以外の読者が読めるかたちで出版されることはなかった。ここには、戦後の文化のゆがみが表現されているよう。

私の「帝国憲法」へのこの間の関心は「天皇大権」とくに天皇の「植民地大権」の憲法上の位置づけである。韓国国会議長（文喜相）の天皇による「慰安婦」への謝罪要求に対する、ヘイトスピーチの水準の日本のマスコミ・政府の反発を見ながら、私は天皇の植民地大権者としての責任が、まったく問われてこなかった戦後の帰結が、こうした恥ずかしい反発が支配してしまう状況をつくったと思った。読んでみて、「天皇機関説」論議は、そのまま「天皇大権」のカテゴリーの位置づけ論議と重なることがよく理解できた。

〈原則批判の思想視座〉をより具体的に力あるものにするには、〈天皇の植民地大権〉がどのような支配の制度をつくりだし運営させたかを緻密に明らかにしていかななくてはなるまい。それは、憲法論としてはまったく論議されていない。戦後の思想（理論）的空白（無責任）は底なしだ。

皇太子日記

6月2日、6月30日

[6月2日]

徳仁、雅子◆愛知県「第70回全国植樹祭」式典に出席。徳仁が「お言葉」を述べる。紀子、眞子◆横浜能楽堂を訪れ、特別企画公演「大典 奉祝の芸能」を鑑賞。

[6月3日]

佳子◆第66回産経児童出版文化賞の贈賞式に臨む。

[6月4日]

徳仁、雅子◆皇居・宮殿で、クロアチア議会のヤンドロコビッチ議長夫妻と懇談。秋篠宮、紀子◆東京ステーションギャラリーを訪れ、陶芸作家ルース・ブリュックの作品展を鑑賞。

[6月6日]

明仁、美智子◆明仁の退位を報告するため、武蔵陵墓地（東京都八王子市）にある大正天皇陵を参拝。

徳仁、雅子◆皇居にある養蚕施設「紅葉山御養蚕所」を見学。

大嘗宮◆「大嘗宮」造宮について、「清水建設」が9億5700万円で落札。

[6月7日]

美智子◆宮内庁病院で心臓の検査を受ける。

即位贈答品◆「即位の礼」で、皇室が祝いの品を受け取ることができるようにする議決案の国会提出を閣議で決定。限度額600万円とは別枠での譲り受けが可能。

[6月9日]

天皇、皇族◆明仁、美智子が赤坂御所（東京・元赤坂）を訪れ、当日に結婚から26年を迎えた徳仁、雅子と共に夕食。秋篠宮、紀子や黒田清子が出席。

明仁、美智子◆明仁のいとこで2014年に死亡した桂宮の墓を参拝。

[6月10日]

美智子◆心臓の弁に異常が認められた。

[6月12日]

明仁、美智子◆京都市にある孝明天皇陵と明治天皇陵を参拝。

徳仁◆英国留学を巡り、前年に日本政府から受け入れを依頼された英政府が、留学先を決めるまでの選考過程が分かる。

[6月13日]

秋篠宮◆ひょうたん愛好家の団体「全日本愛瓢会」の展示会を鑑賞。

紀子◆「ヘルス・プロフェッショナル・ミーティング」に出席。

[6月14日]

徳仁、雅子◆東京オペラシティを訪れ、ウィーン少年合唱団の公演を鑑賞。

秋篠宮◆滋賀県彦根市の認定こども園「平田こども園」を視察。

美智子◆東京都内の病院で、白内障の手術を受ける。

[6月16日]

美智子◆東京都内の病院で、白内障の手術を受ける。

[6月17日]

徳仁、雅子◆日本学士院賞の第109回授賞式に出席。

[6月19日]

徳仁、雅子◆三の丸尚蔵館を訪れ、皇室の慶事を彩る美術品を集めた展覧会「慶びの花々」を鑑賞。

[6月20日]

即位礼◆政府が、徳仁が即位を宣言する「即位礼正殿の儀」の次第概要を決める。徳仁は古式装束「黄櫨染御袍」を着用し、「高御座」から「お言葉」を述べるほか、首相は祝意を伝え、万歳三唱すると、皇位継承に伴う儀式を検討する「式典委員会」（委員長・安倍晋三首相）の会合で了承される。

[6月21日]

徳仁、雅子◆5月5日の「こどもの日」にちなんだ施設訪問として、東京・六本木の港区立麻布保育園を訪問。

[6月22日]

明仁、美智子◆東京都港区のサントリーホールで、指揮者の故渡辺暁雄の生誕100周年を記念した日本フィルハーモニー交響楽団のコンサートを鑑賞。

明仁、美智子◆明仁が皇居・吹上仙洞御所で、美智子が白内障の手術を受けた病院で、それぞれ黙とう。

[6月23日]

美智子◆東京都内の病院で、左目の白内障の手術を受ける。

徳仁、雅子、愛子◆沖縄慰霊の日に、赤坂御所（東京・元赤坂）で黙とうした。

徳仁、雅子◆日本芸術院賞の受賞者を皇居・宮殿に招き、懇談。

[6月24日]

徳仁、雅子◆第75回日本芸術院賞の授賞式に出席。

秋篠宮◆第21回日本水大賞の表彰式に出席。

[6月25日]

[6月26日]

徳仁、秋篠宮◆2020年東京五輪・パラリンピック組織委員会の森喜朗会長が、安倍晋三首相と会談し、徳仁に五輪・パラリンピック両大会の名譽総裁就任を要請したい考えを伝え、宮内庁を通じて調整を求める。

[6月27日]

徳仁、雅子、眞子、佳子◆徳仁、雅子が、20力国・地域首脳会議（G20大阪サミット）に出席するために訪日したフランスのマクロン大統領夫妻と皇居・宮殿で会見。眞子、佳子らが出席して共に昼食。

[6月28日]

明仁◆宮内庁が、明仁の在位中の約30年間にわたって「公務」などの合計を発表。秋篠宮、紀子◆日本との国交樹立100周年を迎えたポーランドを「公式訪問」するため、羽田発の民間機で首都ワルシャワの空港に到着。

眞子◆絵本の原画コンクールの入選作を紹介する「2019イタリア・ボローニャ国際絵本原画展」を鑑賞。

[6月30日]

秋篠宮、紀子◆キュリー夫人の博物館を視察。午後、ウオビチを訪問。上皇侍従◆上皇侍従の河南健が依願退官する宮内庁人事が公表される。

美空の「皇相」

〈言論の自由〉とは何か？ 〈平成代替りを問う〉連続講座

六月一日、午後五時からピープルズプラン研究所会議室で、「平成代替りを問う」連続講座 第二期の第2回「言論の自由」とは何か？ 天皇制賛美と天皇（制）タブー《反昭和Xデー闘争のへ経験》を通して「平成」代替りを考える「Part3」が開催された。今回の参加者は約二十二人。

今回は、松井隆志さんが司会をし、天野恵一さんと森正孝さんと中川信明さんが問題提起をするという形で行われた。

天野さんは、①今回のテーマを思いついた契機・今年の静岡「反天集会」への参加↓かつての静岡「天皇制を考える市民集会」と裁判（判決）についての自分の文章との再会、②一九九〇年一月一八日長崎市長への右翼テロ、③象徴（アキヒト）天皇制《公的行爲》をめぐる闘いへ向けて、という話をされた。

森さんは、一九八八年九月に静岡で発足した「天皇制を考える市民連絡会議」が一〇月に静岡県婦人会館に集会のため会場を申し込み、一旦承諾を得たにも関わらず集会直前に会場拒否通告をされたことに対し「タブーなき言論の自由を求め県の違法と闘う」として静岡地裁に提訴し勝利した裁判の経緯や、大日本帝

国による朝鮮半島の植民地支配が天皇大権によって直接行われたことなどを話された。

中川さんは、昨年七月二九日にこの連続講座で問題提起をしたときには故・高橋寿臣さんも共に問題提起の発言者だったこと、五月一日の天皇代替りから一ヶ月後の現在までマスメディアでは天皇制賛美の報道が垂れ流されていること、退位即位問題を考える練馬での集会に右翼が押しかけたこと、五月二〇日練馬駅前での「朝鮮高校無償化」情宣でヘイトスピーカーとかち合い、ヘイトスピーチが行われたことなどを話され、「毅然と言論で打ち返していく必要がある。そのためにも、もっと多くの人々の結集が必要である」と結ばれた。時間の都合で問題提起後の質疑応答は短時間。今回の講座は二時間あまりだったが、有意義なものとなった。（田中）

あいち植樹祭反対行動情宣

徳仁が天皇になって、初めての「天皇制四大行事」（明仁時代の国体、植樹祭、海づくり大会に、新たに国民文化祭が加わった）出席となる植樹祭が、愛知県尾張旭市の森林公園を会場として行われた。これに先立って現地で学習会などを積み重ねてきた「代替わりを機に天皇制を考えるあいちネットワーク」の人たちが、植樹祭当日の六月二日、名古屋市内で抗議の情宣を行うということで、反天連メンバーもおわてんねつとの仲間とともに行動に参加してきた。

ビラまきをしたのは、名古屋市の繁華街・栄にあるオアシス21という施設の前の公道。この日、この施設の地下にあるサテライト会場で植樹祭関連イベントが行われていた。吹き抜けになっているので、上からイベントの様子がよく見える。

情宣は地元の人が一〇人ほど、各地から集まった人が六人。「全国植樹祭に異議あり！『公務』の拡大は問題！」という見出しのビラをまき、植樹祭は規模一万人、一万本で予算は五億六四〇〇万円という財政問題のみならず、それが天皇の違憲の「公務」拡大に他ならないことを、代わる代わるマイクで訴えた。

ビラの受け取りはよく、また、サテライト会場からは、巨大ビジョンに徳仁の姿が映ったとたん、「天皇帰れ」という声も響く（こちらの行動とは全く無関係の人）。

終わりに、右翼の街宣車が一台やってきてうるさく妨害を始めたが、みんな無視して行動を終えて撤収した。新天皇の「地方行幸」に抗議する現地行動第一弾！準備された方々、お疲れさまでした。（北野 尊）

『女性宮家』『女系・女性天皇』論議をどう考える？

六月一四日、女性と天皇制研究会（女天研）が集会を開催。「女性宮家」「女系・女性天皇」論議をどう考える？」と題し、「女性天皇」容認論をふくめ、皇位継承問

題について、この間メディアはどのように論じているのか、その内容検証と批判が主な目的であった。

規模的にはいつもの講座に近いが、今回は恵泉大学教員の齊藤小百合さんに講演をお願いし、質疑・討論を通して、新天皇即位後の皇位継承論議に、女天研の立場から参加者ともども介入していこうというものだった。

憲法が専門の齊藤さんは、皇位継承問題もさることながら、天皇制そのものの違憲性について詳細に語られた。憲法一章（一条～八条）が、いかに憲法の理念に反しているか。それは女天研でもずっと問題にしてきたところで、そこを憲法的に専門の立場から話していただけた。

そして、敗戦後天皇制を残し、現在も支えているこの日本社会の問題。憲法一条批判と同時に、一条にある「この（天皇の）地位は、主権の存する日本国民の総意に基づく」を引きながら、原理的には日本社会を構成する人々が天皇を否定することによって天皇制の土台を掘り崩し、天皇制をなくしていけることを、繰り返し力説された。それはパワポ（アニメーション）を使った、爽快な天皇制度崩壊の図で説明され、会場は盛り上がり、集会は笑いと納得が入り乱れながらあっという間に終了。

女天研は四月に「代替わりを祝わない！天皇はいらない！」と題するリーフも作った。この天皇ファッショ状況にこれからも反対の声をあげていきたい。（大子）

退位・即位問題を考える練馬の会・連続学習会第四回

「アキヒト退位・ナルヒト即位問題を考える練馬の会」は、六月二日に連続学習会の第四回として、友常勉さん（東京外国語大学、近代日本思想史）により、「部落問題から天皇制を考える」と題する学習集会を開催した。

天皇制は、他国家の類する王政と同様に、世襲により継続されている。そのことが、近代天皇制の成立時に、それまでの貴族の構造から新たに作られた身分制である華族制度や部落差別と天皇制を一体のものとした。しかし、これは米国が戦後日本の支配システムに天皇制を据えるにあたり桎梏ともなった。戦後においては、植民地宗主国

が自らの犯罪を覆い隠しながら、天皇制をそのままに、大日本帝国の人種や身分による差別を「国民主義」の「同質性」に塗りこめなおさねばならず、大きな虚偽が必要とされたのだ。

天皇制による「国民主義」という意識が社会を覆ううちに、天皇も「差別」「疎外」された存在だとして、被差別の側の自分たちをこれに重ねるといふ倒錯した認識が生まれた。これは文化主義的疎外論、文化主義的同化論ともつながり、それはしばしば、反差別という認識から天皇制を撃つていく思想の無力化や内面的抑圧となっていた。

フェイク情報の氾濫とともに、言葉や行為への責任が混乱し、「倫理」や「正義」も拡散させられる。その中で、新たな反差別

別・反戦・反植民地主義の意識形成を、かつての差別糾弾闘争の再定義とともにやり直さねばならないのではないか。友常さんの問題提起は重たいものとして響いた。

当時、「狭山、八鹿、反天皇制」を中心にして闘っていた「少し変わった解放研」の集まりであった自分たちが、「天皇（制）賛美」の大洪水の中で行われる「新天皇即位」のこの時に、「何かせなあかんやろ」というのが、最初の問題意識でした。

「天皇・天皇制」を問う

八〇年代に、関西の郵便局の部落解放研究会で運動していた私たちが、仲間の一人の裁判を支援するために二〇数年ぶりに再び集まりだして五年がたちました。

「尊い」とされる根拠が、「血筋、血統」ときた日には、部落解放研を名乗ってる限りは、声を上げなあかんやろ。

三〇年前も、今も、天皇（制）に対する私たちの根本的な思いです。

そんなわけで、少しビビリつつ、遅れ

学習会報告

大塚英志『感情天皇論』

（ちくま新書、二〇一九年）

大塚英志は〇三年から天皇制を断念すべきと発言しているが、書籍としてはこれが初めてではないかと思う。

柳田国男が構想した、自立した投票行動のできる近代的個人を形成する運動としての「公民の民俗学」を受け継いで近代のやり直しを説き続けている大塚は、アキヒトの退位発言を象徴天皇制という公共性の新しい合意形成に参加する一人の個人の発言ととらえ、「国民」の側はア

キヒト即位以降天皇制についての思考を急り、感情で答えただけだとする。それは公民としてふるまおうとする天皇と公民になれない「国民」という図式だ。公民とは責任主体ことで、天皇がいる限り「国民」は責任主体になれない。「私たちが「個人」にならずとも許してくれるあらゆる思考の枠組を悉く放棄しなくてはならないので「天皇制の断念」が必要と結論する。

彼の問題意識はここまでである。大塚英志には君主制・身分制の問題、差別の問題がまるで見えていないのだ。だから「天皇家バチカン化計画」という錯誤が出てくる。天皇を日本国の外部にしても僕たちは大塚のいう公民にはならない。断念とは廃止であるべきだ。自身がかつて書いた「少女たちの「かわいい」天皇」を否定までもしておきながら、大塚がなぜここで論理を徹底化せず、民俗学的なというかまが性的なというか、妙な飛躍をして逃げってしまうのかといえば、彼が天皇たちにずっと親愛の情を持ち続けているからだ。大塚は天皇と対等な人間同士の関係を結びたいのだろう。この国のナ

ショナリズムを批判し続け、国家の誇りを自身のそれと重ね合わせるあり方を唾棄し続けているというのになんという矛盾か。

本書の大部分は以上の内容を補強する（はずの）文芸批評に費やされており、天皇制断念論そのものは序章と終章で展開されている。僕は文芸批評も面白く読んだが、大塚の分析枠はかなり偏っていて議論が自閉している印象が強いとの指摘が複数あった。

次回は、島園進『神聖天皇のゆくえ：近代日本社会の基軸』（筑摩書房）を読む。

（加藤匡通）

ばせながら、六月三日に天野恵一さんを迎えて「天皇、天皇制を考える」と題した講演集会を行いました。話を聞いて思ったのは、「非常にスッキリした」ということです。

天皇は今も、即位式と大嘗祭を通じて「現人神」であり続けているのであり、存在そのものが民主主義、人権、平等の原理原則に反しているといえます。

「民主的な天皇」、何それ、ということですよ。そんな奴やったら、まず天皇やめるやろ。

「アベと天皇」、一見対立しているように見えるが、「国家の基本構造」としては一致しているといえます。(G)



6月1日(土) ● 天皇制賛美と天皇(制)タブー

6月2日(日) ● あいち植樹祭反対行動

6月8日(土) ● ハイットって何?何をねらっているの?

6月14日(金) ● 「女性宮家」「女系・女性天皇」論議をどう考える

6月15日(土) ● なぜ私たちはパラリンピックに反対するのか

6月21日(金) ● 香港人靖国抗議見せしめ弾圧第4回公判

6月22日(土) ● 安倍・トランプ政権下の自衛隊と日米安保

● 部落差別と天皇制・練馬集会

6月23日(日) ● 「天皇・天皇制」を問う

6月26日(水) ● 即位・大嘗祭違憲訴訟第3回口頭弁論

注目の情報 INFORMATION

3月1日(金) ● 開催中 ● 朝鮮人「慰安婦」の声をきく

13時〜18時(月・火・休日休館) / WAM 女たちの戦争と平和資料館(地下鉄早稲田駅) / 主催: 同館

7月12日(金) ● 香港人靖国抗議見せしめ弾圧第5回公判

10時〜(傍聴抽選締め切り9時30分) / 東京地方裁判所429号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

7月14日(日) ● 議会を浸蝕する差別主義・レイシズムを許すな!

17時45分開場 / 文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 明戸隆浩、石橋学 / 主催: 差別・排外主義に反対する連絡会(vienho@gmail.com)

7月15日(月・休) ● 徹底検証! ナルヒト天皇制

13時15分開場 / 文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 主催: 終わりにしよう天皇制!「代替わり」反対ネットワーク(090-3438-0263)

7月17日(木) ● 香港人靖国抗議見せしめ弾圧第6回公判

13時30分〜(傍聴抽選締め切り13時) / 東京地方裁判所429号法廷(地下鉄霞ヶ関駅ほか)

● 南京大虐殺・靖国に抗議した香港人弾圧を許すな集会

18時開場 / 文京区民センター2A(地下鉄春日駅ほか) / 笠原十九司 / 主催: 12・12靖国抗議見せしめ弾圧を許さな

い会(03-3591-1301)

7月21日(日) ● 第9回「日の丸君が代」問題等全国学習・交流集会

10時30分〜 / 日比谷図書館文化館コンベンションホール(地下鉄霞ヶ関駅ほか) / 世取山洋介 / 主催: 同実行委(連絡先: 090-7015-334 永井)

● 祝賀資本主義とオリンピック

13時開場 / 早稲田大学16号館106教室(地下鉄早稲田駅ほか) / ジュール・ボイコフ、山本敦久、いちむらみさこ / 主催: F O 研究会(連絡先: 03-5266-1868 伊藤守研究室)

7月24日(水) ● 1年前でもやっぱり返上! オリンピック大炎上新宿デモ

18時〜アピール・19時デモ出発 / 新宿アルタ前(JRほか新宿駅) / 主催: 「オリンピック災害」おことわり連絡会(info@2020kotowai.link)

7月26日(金) ● オリンピックと環境問題を考える / オリンピックと居住権

13時〜 / 千駄ヶ谷区民会館1F(JR原宿駅ほか) / 各国の反五輪グループ、稲葉剛、原口剛 / 主催: 反五輪の会(https://hangorin.tumblr.com/)

7月27日(土) ● パネルディスカッション[Make Olympic History]

12時30分開場 / 上智大学中央図書館9FL 921会議室(JRほか四谷駅) / 各国の反五輪グループ / 主催: 上智大学グローバルコンサートン研究所

8月10日(土) ● 平和の灯を! ヤスクニの闇へ 第14回キャンデル行動

13時開場 / 在日本韓国YMCA(JR水

道橋駅ほか) / 高橋哲哉、竹内康人、渡辺美奈、林宰成 / 主催: キャンデル行動実行委員会(03-3656-2841)

8月11日(日) ● 安倍政権による、マスコミを意識的に利用した「天皇教」の布教活動を許すな!

14時開場 / ビーブルズ・プラン研究所(地下鉄江戸川橋駅ほか) / 天野恵一、井上森、松井隆志、白川真澄、米沢薫 / 主催: 同研究所(03-6424-5748)

● 茨城国体令昔物語

14時〜 / 竹園交流センター大会議室(TXつくば駅よりバス) / 主催: 戦時下の現在を考える講座(090-8441-1457 加藤)

8月14日(水) ● 日本軍「慰安婦」メモリアル・デー

13時30分開場 / 日比谷図書館文化館コンベンションホール(地下鉄内幸町駅ほか) / 梁澄子ほか / 主催: 戦時性暴力問題連絡協議会、日本軍「慰安婦」問題解決全国行動(090-6020-5677)

8月15日(木) ● 「戦争」と「トラウマ」もうひとつの戦争

9時30分開場 / ルーテル市ヶ谷センター(JR市ヶ谷駅ほか) / 中村江里 / 主催: 8・15東京集会実行委員会

● 「天皇に平和を語る 資格なし」国家による「慰霊・追悼」反対行動

13時開場 / 在日本韓国YMCA(JR水道橋駅ほか) / 松井隆志 / 主催: 終わりにしよう天皇制!「代替わり」反対ネットワーク(090-3438-0263)